

# ブナ苗木の生産に貢献する結実予測

ブナは黒松内低地帯を分布北限域とする、わが国を代表する落葉広葉樹ですが、まとまった面積のブナ林はもはや貴重なものとなりつつあり、ブナ林の保全・再生に対する関心は道南地方でも高まりを見せています。しかし、ブナは結実する種子の量が年によって大きく変動し、広い地域でほぼ一斉に豊凶が生じるため、播種、育苗、造林などを計画的に進める上で大きな障害となってきました。

こうした問題点を解決するために、道南支場では1990年からブナの豊凶調査を開始し、様々なケースに対応した結実予測技術の開発に成功してきました。現在では、毎年当場のホームページで豊凶予報を発表しており（図 - 1）、これまでのところ86%の確率で豊凶を的中させています。

民営苗畑生産実態調査の統計によれば、ブナの豊凶予報を始めた1997年以降、ブナの播種量は天然林の豊凶に呼応し、豊作年の1997、2002年および並作の2000年に3～5万粒の種子が播種され（図 - 2）、道南産ブナ苗木が生産されるようになりました。このようにブナの結実予測技術は、道南地方のブナの種苗生産現場に反映され、地域のブナ林再生に貢献しつつあります。

（道南支場）

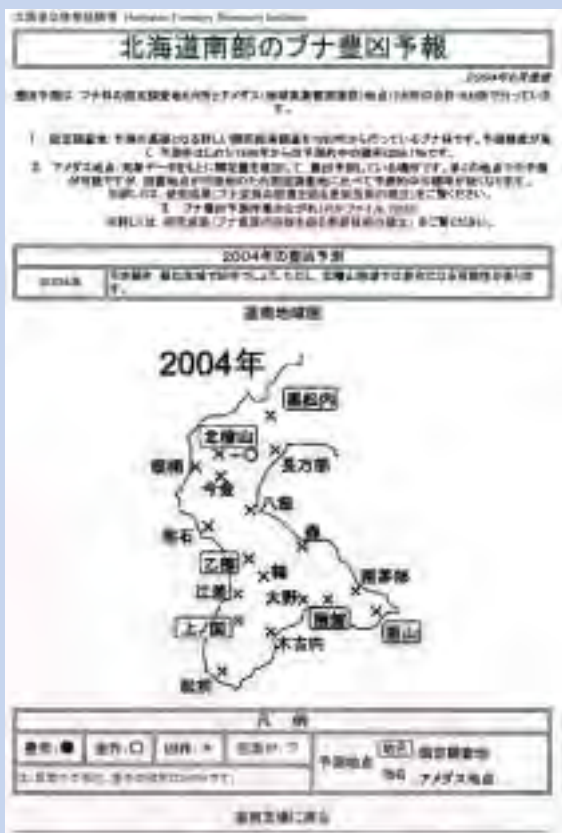


図 - 1 ホームページにて公開中の北海道南部のブナ豊凶予報

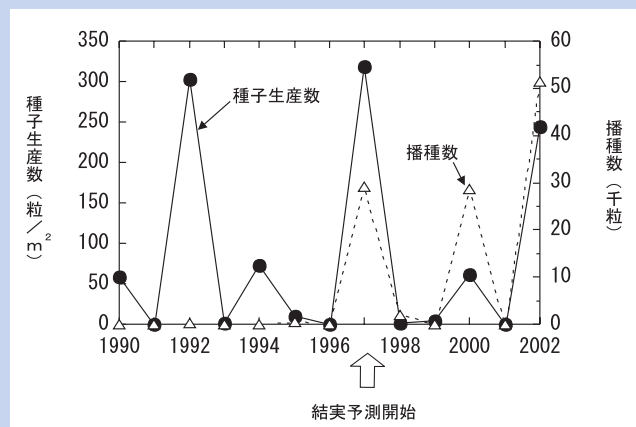


図 - 2 道南地方のブナ天然林における種子生産数と道内民営苗畑におけるブナ播種数の推移